

第9回関西学院歴史サロン

(二〇〇三・一一・一九)

演題 『関西学院スポーツ史話く神戸・原田の森篇く』を書き終えて

講演 米田 満

司会 山本 栄一

山本 それでは第九回関西学院歴史サロンを始めさせていただきます。二〇〇三年度の春学期歴史サロンは、講師の都合で中止をいたしましたので、今年度は秋学期だけを予定いたしました。暮れも押し詰った時ですが、この度『関西学院スポーツ史話く神戸・原田の森篇く』をお書きになった米田満先生を講師としてお招きいたしました。この本は今年六月に発行されました。先生はこの本によって、関西学院の創設から上ヶ原に移転するまでの、原田の森時代の学生スポーツ活動の全貌を明らかにされました。スポーツで活躍された個人の紹介記事や写真がたくさん載っております。この本は、関西学院の生協で販売しておりますので、手に入ります。私は読ませていただきましたが、非常に長

期間にわたってデータを集められています。これは大変なことだと感心いたしました。なお、つい最近の新聞、一二月一〇日の読売新聞阪神版に紹介されたりもしております。米田先生は、保健体育の教授として、一方ではアメリカンフットボールのコーチ・監督・総監督をされたりしておられました。現在は、本学の名誉教授です。昭和三年生まれですから、七五歳におなりになるのですが、とてもお年をめされたようには思えません。この続編でもある『関西学院スポーツ史話く上ヶ原篇く』もたぶんお書きいただけたらと思っております。本日はそういうこともあって、出版を記念して自由にお話をさせていただこうと思っております。まず先生にお話していただいた後、少し時間を残していただい

て、出席者の皆様からご質問があればいただこうと思えます。どうぞよろしくお願いいたします。

米田 こんにちは。米田満です。一九五一（昭和二六）年、関西学院大学経済学部卒業です。五十何年ぶりになりますか、この経済学部の教室にお招きいただきお話をしようとは思いませんでした。いまご紹介いただきましたように、私は、学生時代、五年間アメリカンフットボールをやりまして、卒業後すぐにチームのコーチを始めてそれから監督・総監督をしました。この母校には、私にとつて非常に密接なつながりのある恩師である児玉国之進先生に、保健体育の教師としてお招きいただき、四四年間在職しました。現役時代から数えて、ちょうど五十年目に定年退職の年を迎えて、今日に至っております。

スポーツ史の仕事は三十七年前から

教員をしている間も関西学院のスポーツの歴史を書こうと思ってきました。実際にこの本の出版作業を始めたのは、監督を退任した後の一九六六（昭和四一）年で、今から三十七年前のことです。何から始めたか、といいますとま

ず資料集めです。学院正史の最初のものである『開校四十年記念 関西学院史』を読み、『五十年史』、『六十年史』、『七十年史』等を読んでノートを作っていました。次に基礎的な資料である当時の四つの新聞、『神戸又新日報』、『神戸新聞』、『朝日新聞』、『毎日新聞』、を神戸大倉山の市立図書館で閲覧し、関西学院関連の記事を大学ノートに書き連ねたりコピーをとったりしました。また、東京後楽園球場、現在の東京ドーム、の中にある野球体育博物館を訪ねて資料を収集したり、関西学院の学院史編纂室、当時は学院史資料室ですが、その所蔵で明治時代の関西学院の動きが掲載されている『関西文壇』等を閲覧したりもしました。

それからもう一方では、明治時代の古からの聞き書きを行いました。一九六七（昭和四二）年・六八（昭和四三）年には相当数の方にお会いしました。この本の表題を『関西学院スポーツ史話』としたのは多くの先輩から聴取した聞き書きを極力生かしたいという思いからです。

その後一九六九（昭和四四）年の大学紛争で鮮烈な体験をし、当時危機に瀕しつつある体育会の現状打開のために、一九七一（昭和四六）年体育会OB倶楽部幹事長に就任しました。二五年間関わりましたが、これは私なりに打

ち込んでみようと思った仕事でしたから、かなりの精力と時間を注ぎました。ですけれどもその間、スポーツ史の仕事を放置していたわけでは決してありません。いろんな先輩方にお会いしていくことは継続したり、いくつかの運動部の年史にその前史や創設期のルーツなどを書いたり、学内で論文を書いたりもしました。そして一九九六（平成八）年三月定年を迎えた後、今年六月末に本を出版することができました。いろんな意味で、私にとっては長い間の目標の本でした。出版までずいぶん時間がかかりすぎたと思っておりますが、それだけに一応、関西学院の原田の森時代に形をつけることができたということで、感無量といえますか、自分なりの喜びを感じております。

この本のお話をするのが今日の講演内容ですが、拝見いたしますと、本日今からお話することをご存じの方々に来ていただいて、大変ありがたいと思っております。ただ、私は、あまり上手く喋れないと思いますが、頼りないところはお許しただいて、話を進めて行きたいと思えます。

一八八九（明治二二）年に関西学院が創立された時から、明治・大正を経て、一九二九（昭和四）年の三月までの、神戸・原田の森時代の四〇年間の歴史を書きました。その

間のスポーツの史実についていろんなことを調べたり、聞いたりしながらまとめていったわけです。ご承知のように明治時代の関西学院は、神学部と普通学部、のちの中学部ですね、この二つから構成されていきました。そのなかで神学部生というのは「祈り」と「伝道」という大きな使命がありますから、神学部生もいろんな身体運動をやったでしょうけれど、運動部としてのレベルを考えますと、明治時代は普通学部の中にあつたということがいえます。これも、一八八九（明治二二）年に学校ができてからすぐにどうのこうのというわけにいきませんで、運動部的なまとまりが出来てきたのは、明治三〇年代に入ってからでした。

一番古い記録は端艇部に関するもの

一八九三（明治二六）、九四（明治二七）年にまずボートの動きが始まりました。関西学院のスポーツ史の中で、時期の明示された一番古い記録は、端艇部に関するものがあります。スポーツという名前は一九一八（大正七）、一九（大正八）年にやっといろいろな新聞、雑誌に出るぐらいのことですから、当時は、運動とか運動競技とかいう名前ではいわれていたと思うのですが、当時ボートは端艇とい

う言い方でした。端艇は、明治時代運動競技の花形でして、かなりの学校がボートを所有していて、それを持ってきてレースをやっていました。特に官立の（東京）帝国大学とか第一高等学校とか、その他官立・公立の学校が熱心によったという歴史があります。関西学院でも一八九四（明治二七）年に、古いボートを和歌山中学校から譲り受けて、和歌山から持ってきて、敏馬みまの浜で漕いだという歴史が運動競技の最初です。

その後、明治三〇年代に入って野球、いわゆるベースボールですね、これが動きだしました。いろんな運動競技は、明治の初年に少しずつ西洋から入ってきました。特に横浜とか神戸とか、港のあるところから入ってきましたというひとつの言い方がありますが、ベースボール、サッカー、テニスとかが日本に入ってきて来ました。ベースボールは、関西学院では明治三〇年頃から、集まってボール投げをして、だんだんと人数を増やして、対校試合をするという形で始まっております。

一 高野球部が外国人チームに勝つ

これに関連して、直接関西学院に関係はないのですが、

横浜に Y C A C (Yokohama Country & Athletic Club) という外国人の倶楽部がありまして、もちろんアメリカが本場の野球ですから、その Y C A C チームは強いわけですね。日本でやりだしたいろんなチームは、だんだんと腕を上げて、なかなか外国人には勝てないという、そういう状態が、明治初年から一〇年代、二〇年代、ずっと続いていました。一八九六（明治二九）年に、初めて第一高等学校が、資料には Y C A C と書かずに横浜の「外人倶楽部」と書いていますから、おそらく横浜の Y C A C だと思うのですが、それと試合をしまして二九対四と大差で外国人に勝ちました。その後、続けてもう一回やると、また三二対九で勝ちました。この時、「一高が腕を上げて、外人チームをやっつけた」というので、一高関係者はもちろんうれしいですから、感激して勝った彼らを迎えて一高の学校の中で歓迎の宴を開きました。第一高等学校には『一高向陵史』という有名な冊子がありますが、この本の中にも一高の快挙を祝して、「皆が彼らの頑張りを称して宴を催して非常に愉快であった」と書いてあります。この中に、一高の総代の守随啓四郎という方が、選手たちに労いの言葉をかけて演説するのですが、この守随しゆいという名前が、どの地域によくある名前か私はよく知りません。

実は、一九二八（昭和三）年に関西学院の野球部のピッチャーをしていて、その年度原田の森時代の最後に運動部長をした、守随乙作という方がおられました。この方は、その後東京に住んでおられまして、昔のことをお伺いしたお一人です。たまたま『一高向陵史』に書いている一高の総代の守随啓四郎と守随乙作、同じ姓だから何か関係はないだろうかと思つて、早速、乙作先輩に手紙を出したのです。「この守随啓四郎という方、何か関係はございませんか」と伺つたら、先輩はすぐに「啓四郎は、私の親父の弟です。一高、東京帝大を卒業した後、一九二一（大正一〇）年頃は住友銀行の大阪中之島支店の支店長をしていました」と返事をいただきました。私は二人が結びついたと思つて喜びました。その後、乙作さんがさらに続けて、「啓四郎の長女、時子は縁あつて関西学院の吉岡院長の長男、美清さんと結婚した」ということを書いてくれました。どこにご縁があるかわからない、とびっくりしました。「結婚したのだけれども、何年かして時子さんが、胸部疾患で離縁ということになり、その後時子さんは東京の妹さんの家で長く療養していたようだ」ということを書いてくれたのです。それだけのことですが……。

一高が横浜の外国人をやつつけたことは、日本の野球史

では、特筆すべき大きな出来事であつたわけですが、その一高の野球の選手団をねぎらつた一高総代の守随啓四郎さんが、関西学院の守随乙作さんと結びつく、また乙作さんが書いてくれたことによつて、関西学院の吉岡院長や吉岡美清さんともつながつたのは、非常に面白いなと思つたものです。

それで関西学院のベースボールといえば、乾精末さんという人物が大きな要素としてとりあげられます。神戸の雲中小学校から関西学院の普通学部に入りました。小さい方なんです。私とそう違わない一六〇cm位の方なんですけれども、この人がものすごいリーダーシップのある方で、スポーツの能力もあつて、明治三〇年に関西学院に入つて、それから三四年までおられました。三五年にはアメリカに行つて勉強されます。野球少年ですからその辺の仲間を語らつて、乾さんが在学中の五年間に、本格的なチームとはいいませんが、一応のチームの形付けに一番貢献をしたという方なんです。

この頃にいた仲間には、その後も関西学院の教員として残られるいろいろ活躍された畑敏三さん、畑道也文学部教授のお父さんですね。それから神崎驥一第五代院長。宮田守衛さん、宮田満雄元院長のお父さんです。中村賢二郎さ

ん、この人も、後に関西学院の普通学部 of 先生になり、戦前関西学院の総務部長の要職につかれた方です。それから、早稲田を出て政治家になられた永井柳太郎さん。こういう方々が当時おられて、一緒にベースボールをやられた仲間達だったのです。

この頃の野球は、用具ももちろん不十分だったですね。キャッチャーのミットが一つだけあるという状態でやっていました。一八九七（明治三〇）年頃から、先ほどのような第一高等学校が外国人をやつつけたことが日本中に広まって、野球がグンと盛んになった要因のひとつだといわれていますが、用具という点でも進歩をした時代です。

野球チームが京都まで歩いて行く

この乾さんがリーダーとなって、一九〇一（明治三四）年に同志社と初めて試合をします。この時、もちろんお互いに連絡を取り合い、何月何日に試合しましょうということになるのです。この頃には汽車も走っております。東海道線は一八八九（明治二二）年、関西学院創立の年に開通して東京と神戸の間一日一往復というのが始まっていますから、それから一二年後の一九〇一（明治三四）年です

から、一日に何本かは走っていたと思うのです。しかし、乾さんたち若者は汽車には乗らないで、原田の森を朝早く出て夕方までおよそ八〇キロの道程を、一二時間歩き通しても、もちろん行く途中で持参した握り飯は食べましたけれども、同志社の寮で泊めてもらうことで京都へ遠征します。次の日に、同志社と試合をします。同志社の方が少し先輩格ですから、大接戦で負けましたけれども、次の日に京都の連合チームと対戦しまして、これには勝ちました。京都で二試合して、次の日に帰りました。淀の夜船で京都伏見から淀川を下り、大阪に帰って来て、そこに大阪第五中学校のグラウンドがあつて、野球の練習のようなことやっているのを見て、「試合をしようか」と練習試合を申し込み、そこでは勝った。

乾さんは、一九〇二（明治三五）年一月にアメリカに行きます。ウエンライト先生が、関西学院の高等科のための基金募集、礼拝堂建築費募金の重任を帯びて帰米する機会がありました。その時に乾さんは、ウエンライト先生に伴われてアメリカに渡りました。しばらくして東部地方に行き、ミシガン大学に入って学生時代を過ごすわけです。この人は非常に英語が天才的といえますか、「天賦の能力」があるという資料があります。もちろん一から英語を勉強

したと思いますけれども、とにかく英語を吸収したのですね。明治三九年に東部九大学の懸賞演説大会に出場して、これに優勝してかなりの賞金をもらったことが日本の新聞にも報道されて評判になりました。その後ずっとアメリカにいて、丸木舟でミシシッピー川を漕いで下ったりとか、冒険心のある元気な方なのです。サンフランシスコの日本人協会、日米協会、の書記長をしながら、二〇何年間をアメリカで過ごされました。その後、外務省の顧問をしたり、国際会議のいろんな枢要な地位に就いたりした方です。

百年前のアメリカンフットボール

乾さんはアメリカンフットボールの選手でもあったのです。実は、いまから百年ぐらい前、一九〇七（明治四〇）年頃のアメリカンフットボールは非常にポピュラーなもので、レギュラーのチームがあるわけで、もちろん対抗戦もしています。各クラスにクラスチームというのがあって、クラス対抗などがずっと行われていました。乾さんは、小さいけれども、ミシガン大学でクラスチームのエンドとして非常に活躍をされました。乾さんがシヨールダーを着けて、フットボールパンツをはいて、ユニフォームを着てい

る写真、しかしヘルメットは外していますから顔はちゃんと判ります、その写真を、乾さんが畑歎三先生のところへ送ったのです。それを私はご子息の道也先生からいただきました。その写真は素晴らしいなと思います。アメリカンフットボールの歴史としても、百年前のアメリカで、日本人がこのようにしてやっていたと、もちろん、レギュラーのチームではないけれど、それでもアメリカンフットボールに触れたのだという写真をこの本に載せましたが、フットボールとも貴重な関わりのある方です。

たくさんの方に手紙を出してお会いしたケースのひとつとして、乾先生にもお手紙をさし上げました。そして、先生から一九六七（昭和四二）年九月に「久しぶりに原田の森に行きたいから迎えに来てほしいのだが」という手紙が来ました。私は「喜んでお迎えします」とお返事しました。それで九月二七日、新大阪に、ちょうど「ひかり」が一九六四（昭和三九）年から走っていましたから、お迎えに行きました。先生には秘書のような方が一人おられました、その方と二人で来られました。私は車の運転が出来ませんので、家内の運転で私が横に乗って、先生と秘書の方を後部座席にお乗せして、原田の森、みるめ敏馬神社などを回りました。また、クラスメートの中村賢二郎さんが、その頃

ご健在でしたので六甲のお家に行きまして、乾さんと何十年ぶりの再会だったと思いますけれども、二人でしばらく語らっておられました。その時の写真もこの本に載せました。別れる時に、乾先生がポロリと涙を出されたのが非常に印象的でした。

「わしは、百まで生きるぞ」

そんな出会いがありまして、その次の日の二八日は、本の創立記念日で、ランバス記念礼拝堂で記念式典がありました。私は、学校に就職して一五年になる時でしたので、学院から、感謝状と金一封をいただきました。その席に乾先生が来てくださいましたので、「大先輩です」と参列者の方々に紹介いたしましたら、学院の古い方は、もちろん乾先生のお名前とご経歴をよく知っておられて、先生がお話をされたりしました。先生の郷里は徳島でしたので、その日の午後に神戸の中突堤までお送りして、お別れをしました。その時にお約束をしまして、一〇月九日、一〇日の二日間、先生のお宅がある、御殿場に行きました。YMCAの東山荘という宿泊所に泊まりまして、まる一日と少し、お話をお伺いしました。先生は、非常にお元

気で、八四歳でしたが、「わしは、百まで生きるぞ」とそんなことを言いながら昔話を元気にしてくださいました。お別れして帰ってから、すぐにお札の手紙を出して、さあ、先生から何か返事があるかなと待っていましたら、しばらくして秘書の方から、一〇月二〇日に脳軟化症で、先生が亡くなったという連絡がありました。お元気な方だったけれど、僅かに二日間床について亡くなられたということとで、非常にびっくり仰天いたしました。ちょうど一〇月二〇日という日は吉田元首相が亡くなった日と同じです。この方が、関西学院の普通学部の野球についても、チームらしいものに動かしていくための中心の方だったということがいえると思います。

日本最初のゴルフコースを作る

それから、明治時代の神戸の居留地に外国人のA・H・グループ (Groom, Arthur Hesketh、一八四六～一九一八)さんという有名な方がおられました。この方はいろんな趣味のある方で、山歩き、登山が好きで、六甲山はしょっちゅう登っていたのですが、六甲山に初めてご自分の避暑の家を作ったりして、そのうち、ある人から勧められて

ここに日本で最初のゴルフコースを作りました。一九〇三（明治三六）年のことです。最初四コースを作りました。

今考えても、交通手段はどのようなものだったのかと思うような時代ですが……。グルームさんが、言い出しつぺといひますか主導者で、その他の外国人も働くのですね。名前は「神戸ゴルフクラブ」といひまして、発会式を一九〇三（明治三六）年五月二四日に行ひました。この時、服部一三兵衛知事が来て最初のドライブ、始球式をやつたという史実があります。このグルームさんのお孫さんの一人に、宮崎真次という方がいまして、関西学院の昭和一四年度の野球部のキャプテンで一五年度卒業の方です。グルームさんは神戸の商人だったので、その宮崎真次さんとのつながりで、関西学院ともつながってくれたなと思つてゐるわけです。昭和四三年頃、一度だけ宮崎さんと神戸の三宮でお会いして、一杯飲む機会を持ちました。グルームさんのことや、ゴルフの話をしたことがありました。

服部一三さんは、兵庫県第一三代知事だった方ですが、この人は、在職が長くて名知事といわれたそうです。この人の息子さんが服部四郎さんといひまして、関西学院の普通学部に入りまして、三年で辞めて、神港商業に転校して、それから、高等学部が出来たのでまた関西学院に入つ

てきて、関西学院高等学部商科を一九一八（大正七）年に卒業されました。ここでも関西学院との結びつきがあります。

西村貫一が「日本のゴルフ史」を書く

一九三〇（昭和五）年に『日本のゴルフ史』という本が出版されています。この本に発会式の模様が詳しく書かれていますけれども、これを書いた方は、西村貫一さんで、関西学院普通学部の卒業生の方です。一八七〇（明治三）年メリケン波止場の入口に開業した旅館であり、第二次世界大戦後の営業廃止に至るまで海外渡航者の専門旅館として神戸の発展と共に繁昌していった西村旅館の当主です。また海外から来てこの旅館に泊まる人の中には、非常に著名な方がずいぶんいました。そういう人に宿帳を書いてもらつており、それが西村旅館の貴重な財産となつています。この方は、ご自分でもゴルフをされ、また奥様もされました。奥様は日本の草分け女流ゴルフアード、神戸倶楽部で五年連続で優勝されたりした方です。今ゴルフは非常にポピュラーなスポーツになつて、本や雑誌がたくさん出ています。それらのすべての原点は、この『日本のゴルフ

史』だといわれております。日本のゴルフの発祥に関わったグループさん、服部知事、それから西村貫一さんと、大小にかかわらず、関西学院につながりがあったということも面白いことだなと思います。

五十一歳の吉岡院長が富士山に登る

いろんなスポーツの他に、昔の人は本当によく歩いたんですね。山登りをしょっちゅうして、関西学院の北側には、関西学院の裏山といわれるような摩耶山がありまして、昔の人は、ちょっと時間があると登ったようです。電車が、そのうちには阪神とか阪急とかが動き出しましたけれども、明治の方はもちろん、かなりの所から歩いて関西学院に来ていたということで、歩くのはいくら歩いても苦にしない、そういう時代でありました。その中で吉岡院長が、一九二二（大正元）年の夏に、学校の教職員三六名の方々と一緒に富士山に登っているのですね。これは当時の『関西学報』（第一七号、一九一四（大正三）年一月）という雑誌に詳しく書かれています。また別のアルバム（「旧関西学院時代」）を見ますと、富士山に登って菅笠を被ってひと休みしている院長だとはっきり判る写真があり

まして、貴重品だなと思い、それもこの本の中に載せました。ですから、当時は五十一歳の吉岡院長をはじめ、年配の方を含めて若い学生生徒などは、当然のようにいくらでも歩いたという時代でした。

明治時代の普通学部、のち一九一五（大正四）年から中学部になりましたが、一九〇七（明治四〇）年頃には院友会、関西学院の院、友達の友ですね、院友会という名前で、端艇部、野球部、庭球部、柔道部、剣道部、の各部分はの名前をつけて練習もし、試合もし、活動していたということがありました。

テニスでは、当時、浜寺の大会というのが一番権威があり、毎日新聞社が主催した大会です。そこで関西学院から優勝者ができます。テニスは大正の中頃までは、全部軟式テニスで、ダブルスですから、二人で優勝したというレベルにまで関西学院は達していたのです。

野球部も、当時第三高等学校が権威のある三高大会といわれる大会をやっていました。ここへ連年出場すると、やはり負ける方が多かったので、この大会を一番大きな目標にして、野球部は研鑽したということです。

それから、ボート部も頑張りまして、一九一一（明治四四）年、一二（明治四五）年と二回、琵琶湖の大会とい

まして、大日本武徳会というバックがあり、かなり全国から集まって、全国中等大会、一般の大会とかいろいろありましたけれども、これに初めて出て行って非常に好成績を挙げました。出場中の優秀な三チームが選ばれて、最後の優勝競漕という選抜のレースに初出場の関西学院が出るのですが、この時は残念ながら三位になりました。それで、その次の年にまた琵琶湖を目指そうと、非常に研鑽して、練習タイムがひとつの参考になりますけれども、「関西学院のクルーはものすごく強い」、「今年の琵琶湖は、関西学院が取るぞ」という評判が出ていよいよ大会、という時に明治天皇が亡くなり、大会中止となって、残念ながら関西学院が優勝するだろうといわれた方々が、戦わずして帰ってきたという歴史があります。以上が明治時代の普通学部の主な流れです。

明治から大正に移って、関西学院は大きくなっていきます。一九一〇（明治四三）年に学校経営ということからみますと、それまでアメリカ南メソヂスト教会が経営してきたミッションスクールに、カナダ・メソヂスト教会が加わりました、両者で一緒に関西学院という学校を経営しよう、ということになります。例えば、いままで一万円のファンドでやっていた学校が、二万円に膨れたということに

なるわけで、それに応じて、それまでの一万五千坪の土地を東側に広げて二万五千坪に膨らませて、学校の拡大を計りました。一九一二（明治四五）年になったら、ひとつ上のレベルの専門学校を作ろう、校舎も作ろう、普通学部をまた新しくしようと、いろんなことを決めながら、また決めることが出来るような素地が作られて、明治から大正に移っていきました。

高等学部の一期生は二九名

一九一二（明治四五）年の四月に専門学校の高等学部が始まるわけで、四月に学生を募集したのです。最初はいろんなところにPRをします。百名を募集するということですが、スタートしたのですが、なかなか百名は来なくて、結局、パーティーテストではなくて、内申と面接で、もちろん面接が駄目だったら不合格ということで、高等学部の商科が三名、文科が三名、合計三九名に入学許可をしました。これだけの学生を専門学校令による高等学部第一期生として採ったのです。この時、以前からあった神学部は五年制度で、一年から五年まで三〇人の神学部生がおりました。これを合わせますと、新しい商科・文科の学生とで六九名の

学生です。

当時の神学部のなかの世話人がリーダーになって、新しい商科・文科からも誰か世話人を出せということで相談をして学生会を作ります。「専門学生会」という名前です。いまの学生会と一緒にですね。運動部もあれば、文化部もあれば、音楽社交部もあるということで、いろいろ作るんですね。しかし、土台の学生数が六九名ですから、たくさん作って、はたしてこんなの皆出来るのかな、と誰が考えても思うようなことですが、しかし、当時の学生のリーダー、世話人の方は作っておこうと思つて作られたのでしょう。運動の好きな人や能力のある人は、仲間をさそつて野球をする、テニスをやる、ボートも漕ぐというようなことで、何年間か過ごしていきます。その間、次の年にも新しい学生が入つて来ます。三年、四年たつにつれて学生数はずつと膨らんでいき、四年後にやつと野球をプロパーでやれるという人員を揃えることが出来たわけです。

運動部の成立

いろいろなことを含めて一九一五（大正四）年に、野球部と庭球部と端艇部、この三つが初めて運動部と認定される

わけですね。その認定したのは、先ほどの学生会なわけです。運動部としての基本は、然るべき人数、次に然るべき技量の者が集まつてこないといけないわけです。それと、ひとつの組織として、あちこちいかずに野球なら野球で専門に頑張り練習をしていかなければいけない。そういう状態が得られたら、学校もそれに手をかすわけで、顧問という形で先生がクラブにタッチします。そして、活動していくわけだから金も要るだろうと、金も何がしかのものを与える。それから学校の中のこの場所を使いなさいと、練習場の便宜も与えてやる、ということとで運動部が整備されていくわけです。その運動部に求められるのは、関西学院の運動部だから関西学院の名誉にかけてしっかり練習をし、試合をしろよという期待と、バックアップがあるわけです。そういうことを経ながら運動部は成立していったということがいえると思います。

この頃、すでにプレーヤーは「選手」という言い方をされてきました。これは一八八七（明治二〇）年頃に第一高等学校が「一高時代」という一つの時代を作ります。この時にプレーヤーを、「選手」と初めて名前をつけたのです。選手は選ばれたる者だから、それだけの自覚を持ってやるようにと、「選手」の名前の中に学校の大きな期待、

激励といえますかそのようなものがあつたということになります。それ以後、いろんな所でやるいろんな種目のプレーヤーは、「選手」という言い方をされ、力一杯練習して選ばれたる者としての自覚を持って、それに値するようなことを期待されていきました。

運動部になつた最初の部は、先程申し上げましたように一九一五（大正四）年に野球、庭球、端艇部、一九一七（大正六）年に武道系の剣道、柔道、弓道、相撲部、この四つが、正式に運動部として認定されます。一九一八（大正七）年には蹴球部と陸上競技部の二つが、一九二三（大正一二）年には水上競技部、一九二六（大正一五）年には藍球部、これは後のバスケットボール部です。一九二八（昭和三）年にはラグビー部、卓球部、がそれぞれ認定されました。この中で端艇部は一九一九（大正八）年に廃止されました。その他に山岳部もできました。その中にスキーとスケートがあり、これが一応スキークラブ、スケートクラブとして活動していました。なお、射撃とか馬術、それに軟式庭球とかは、クラブ的な活動としてありましたから、合計で一八か九ぐらいが原田の森時代のクラブの数でした。そのうち、一九二八（昭和三）年の正式な運動部は一三になりました。

一九一五（大正四）年に庭球部が運動部に認定されました。練習をしつかりして試合をしようと辺りを見回したところが、専門学校というのは当時そう多くはないのですね。ただ、関西学院のあつたすぐ西隣、道ひとつ隔てた所に神戸高等商業学校（現神戸大学）がありました。これは、西日本の権威のある高等商業学校の一つですから、英才、秀才が非常に厳しい試験を経て入って来るということで、学校も、また学生も、自信と自負とを持っているわけです。もちろん勉強も研究もするでしょうけれども、クラブ活動も頑張っていました。スポーツ、運動部、文化関係のクラブ、それらがこぞって関西でトップを占めるということを標榜して神戸高商は動いていました。

庭球の神戸高商戦が始まる

神戸高商はちよつと桁外れに強いから歯が立たないというので、大阪の方に行つて大阪高等商業学校（現大阪市立大学）と試合をしたり、中学校レベルかクラブ的なところと庭球部は試合をするわけですが、一九一六（大正五）年になって、神戸高商と負けるだろうがやってみようかということになり、試合を申し込むわけです。神戸高商は、

向こうも相手がなかなかいいわけですからやろうということになり、神戸高商と関西学院の対抗戦が始まります。ただ、神戸高商はいつも高きに留まっていますから、「試合は我が高商コートでやろう。関西学院はすぐそこだから来い」ということで、神戸高商のコートで試合をします。試合の審判は主審と副審がいるんですが、「主審は必ず神戸高商から出す。副審は関西学院から」というような基本的な取り決めを、この中にも官立の神戸高商の自尊心といえますか、尊大な考え方というものがあつたのですが、関西学院はそれを甘んじて受けて、対抗戦を始めるわけです。でも、庭球部の技術、レベルが違いますから完全にやられてしまうわけです。一九一六（大正五）年から始めて二〇（大正九）年まで続けます。一九一九（大正八）年に春・秋二回やった春の試合の時に、最初の試合で関西学院のサーブをしたボールが、ライン上に入ったか入っていないかを巡って、紛争といえますか言い合いになります。その落ちた地点は、関西学院の副審のいた地点に近いのですが、この副審は「入った」、神戸高商の主審は「出た」と。その判定で、勝敗が分かれるわけですから、それだけのことで一時間も時間を潰したのです。この頃、明治・大正のスポーツをする人は、本当にフェアにやろうと、スポーツ

はそんなものだとどこかで聞かされているけれども、実際には試合をしたらず喧嘩する、というのがくつついていたというくらいでした。先ほども言いました乾精末さんも、「野球の試合に行く時は、いつもこん棒を持って行つておつた。終わつたらどこかで殴り合いましたことが何回もあるのだ」ということを仰しゃっていました。そんなことで、テニスのサーブが入つた、入らないで一時間も費やすわけです。そして、その分だけ試合が遅れて進行していつて、最後の試合のひとつ前ぐらいで、時間が六時半になります。そんなに遅くまで時間はかからないとして、その時は、「試合は六時半にて終結するものとする」という取り決めがあつたのです。たまたま、六時半になる前の時点では、両方がだいたい均衡して進んでいて、関西学院の方が二セツトリードしておりました。もう一つとれば得点となり、関西学院が有利という状況の中で、六時半が来たわけですからもう少し時間があれば、関西学院が初めて勝つことができたかも知れません。「時間が来たから試合中止」と主審が宣告する。これは、初めから取り決めがあつたのだから仕方がないといえるのですが、当然のように神戸高商の主審は、タイムアップということで試合を中止します。

当時の新聞、運動雑誌がその試合を取り上げて、「関西

学院は今まさに勝たんとするところだった。しかし残念ながら時間が来て勝てなかった」ということを書いたのです。神戸高商には『学友会報』という立派な学内報があり、これにはいろんなことを詳しく書いていますが、この試合に関してはその一行一字も書いていないのです。これが当時の運動家の面白いところですね。神戸高商に、それだけの度量がないといえますか、もしかして、関西学院に負けていたかもしれない試合だということを書くのを避けたし、彼らは書けなかった。そういうことが、当時の運動家の底辺にずっとありました。

そのようなことを経て、一九二〇（大正九年）の春、六月一三日、関西学院は学校を挙げてすぐ隣の神戸高商に行きます。コートを挟んで向こうが神戸高商、こちらが関西学院です。一九一六（大正五）年に始まった対抗戦は七回を数えましたが、これまでずっと勝てなかったという状況でこの日を迎えます。どの対抗戦の時にもそうですが、試合前日、チャペルで壮行会が行われました。選手を壇へ上げて、キャプテン、マネージャー、それぞれが「頑張る」とか、「我々は、ここまで力を付けてきたから明日は勝つ」というようなことをその時に言ったのです。言えるだけの力を、その時に持っていたということですが、チャ

ペルで皆も応援演説をして盛り上げました。

「負けたら腹を切ると言ったじゃないか」

試合当日、精神的にもその他いろんな面で、神戸高商に力があつたのでしょね、彼らが勝ちました。試合が終わって応援団と一緒に原田の森に帰ってきて、選手が芝生の上で丸くなって座り、その周囲を応援の学生が取り巻いている。その中で選手は涙を流すだけの人もいれば、声に出して泣く人もいます。声もなく泣いている人、などいろいろな状況です。その中で応援者の一人が「おい、マネージャーの誰々、お前は昨日の激励会の中で負けたら腹を切ると言ったじゃないか、腹を切れ」と言った。そんな時代でも、非常に激烈な情景ですね。実際に言ったのですから選手はしょんぼりしています。その時に小寺敬一先生、関西学院の院長や学長も務められた小寺武四郎先生の叔父さんですが、「まあ待て、選手もよく頑張っている一息だったかも知れない。力の足らないところもあるが、腹を切るのには堪忍してやれ」と口を添えていただいて、腹切りをせず済みました。これがこの日の試合後の情景です。

テニスは、一九二〇（大正九）年の秋頃から、それまで

軟式ばかりだったのが、硬式に転換する動きがありました。日本の多くの学校で、硬式に転換しました。それ以後は、硬式で神戸高商と試合をすると、かなり関西学院が勝っていったという史実があります。いまテニスを取り上げましたけれども、テニスの他に、野球、柔道、剣道にしても、神戸高商と対抗する時にはとにかくこちらは私立、向こうは官立という違い、向こうは非常に高きに留まっています、こちらには何クソという気持ちがあります。一九一五（大正四）年、一六（大正五）年、一七（大正六）年は、残念ながらどの種目もまったく歯が立たなかったのですが、一年、一年と関西学院も力を付けてきて、一九二〇（大正九）年の時点では、「八百の友君を守る」と、応援歌にあるように、学生も八百名が増えて、段々と関西学院が充実してきた、ということを書いてある歌もあります。大正時代は、勝ち負けは別にしても、その後も続く関西学院と神戸高等商業学校のいろんな種目の定期戦、これはどちらの学校の学生も青春の大きな部分だった、ということが言えると思うのです。

陸上競技部が大敵早稲田を破る

大正期に非常に記録を伸ばしたのは陸上競技部です。一九一八（大正七）年に部が出来た時は、一年生と二年生だけの若いチームでした。これが二年を経て、三年生と四年生を主力とし、着々と力を付けてきて、早稲田に対して試合をしようと申し出をします。たまたまその前年に慶応と神戸高商が、鳴尾運動場で試合をします。これは慶応が勝つのですが、これを見た関西学院は、我々も東都の大学と試合をしようということ、早稲田に申し出をします。この大正九年の時点で関東にもかなりの学校がありました。早稲田、慶応がやはり二つの巨頭で、中でも早稲田が、私学のナンバーワンでした。相談をして一九種目の対抗戦で、エントリーは両校三名ずつ、一等は三点、二等は二点、三等は一点という得点で試合をしました。関西学院は頑張って六三対四五という得点で天下の早稲田をやっつけました。これが第一回の早関陸上です。

この鳴尾運動場は、今の阪神鳴尾駅の南側ですけれども、ここに明治時代から競馬場がありました、そこを大きなグラウンドにしたんです。野球場が二つぐらいいは十分取れる。トラックは四〇〇mではなく八〇〇mで、直走路は四〇〇mもあるマンモス競技場で大会をしたのですが、遠すぎてスターターのピストルの発煙がバーンと鳴っても見

えにくいし、聞こえにくいし、大きすぎて困る、ということとで、その後はいいように改善されていきました。

神戸高商の試合放棄

関西学院が、天下の早稲田を破ったということはすごいニュースです。これを陸上競技関係者、学校の人たちは聞いたのです。神戸高商は何クソということで、試合をやりましたよと、今度は向こうから申し入れがあった。関西学院はそれを受けて、その年、一九二〇（大正九）年、七月一日に鳴尾運動場で行いました。配点も早稲田と同じようにしてやるのです。一つひとつの競技は息づまる白熱戦となって進行していきます。あと二種目、ひとつは走幅跳びで、もうひとつはメドレーリレーを残して、夕方の七時四〇分になりました。七月ですがもう薄暗いですね。この時の得点が五二対四七で、僅か五点差で関西学院がリードです。神戸高商は「これだけ暗いからだめだ。二種目残しているがノーゲームにしよう」と審判団に申し入れるのです。これを受けて審判団は協議をしました。審判長は春日弘さん、住友財閥のトップにおられた方ですが、「それはだめだ。このトラックの四隅とジャンプ場に枕木を焚いた

らやれる状態だ」と、競技続行を審判団としては決めました。これに対して神戸高商は不本意ですから、何かと時間を延ばそうとしたのを見て、審判団は、「神戸高商は棄権の状態とみなす」として、それまでの得点をもって試合終結とし、関西学院の勝ちという宣告をしました。これも非常に激烈な、バックに両校のいろいろな敵対意識があるこんな状態で、第一回の試合が行われたのです。このとき、毎年これからやろうという締結をしたのですが、神戸高商は次はもうしませんと言った。これも面白いです。それから六年経った一九二六（大正一五）年に、第二回として、復活いたしました。これが陸上競技の春の対抗戦の素晴らしい記録です。早稲田との定期戦は、何十回と続きましたが、だんだんと差が開き過ぎまして、一九六四（昭和三九）年の第四三回の時に、早稲田の四二勝一敗ということになります。ここで、両校が相談をしまして一旦定期戦をストップいたしました。関西学院の百周年の時、一九八九（平成元）年に復活いたしました。

陸上競技の快進撃はさらに続きます。それは対校試合の形式ではなく、チームの枠を結集したりレーとしてです。一九二〇（大正九）年当時、関西学院もそうですが、秋の運動会の際には、いろいろな学校を招待して、いろいろな

レースをしますが、その中でも一六〇〇mリレーというのが一番の呼び物でした。関西学院は秋に神戸高商の運動会に出て行って、一六〇〇mリレーで一位、京都帝大のリレーに出て、これも優勝しました。この時優勝校に済美旗せいびきという旗と金一封をくれます。この金一封の包みの表には「金二千匹」と書いてあるんです。一匹、二匹の匹です。二千匹、いまのお金に換算していくらになるかわかりませんが、もらった関西学院の選手は、そこそこの額だろうと思つて、帰りに京都で祝杯を挙げて、二千匹を喜び勇んで開けてみたところが、五円札一枚しか入ってなくて、アシを出して帰ってきたという笑い話があります。

アンカー伊達の底知れぬ力

それから一週間後、東京に行つて東京帝大の運動会で一六〇〇mリレーに出場するのですが、そのリレーは、当時の陸上界では非常に価値のあるレースといわれ、その勝利はインターカレッジの優勝に劣らぬ評価を受けた時代でありました。この時に出てきたのは早稲田、慶応、第一高等学校、関西学院の四校です。わが方のアンカーは伊達宗敏さん、四年のキャプテンです。それまでずっと勝っている

関西学院ですから、ここでも有力視はされておりましたが、当時日本のトップ・チームである早稲田、慶応、一高ですから、緊迫した試合になるという予想が立ちます。ところが関西学院は調子が悪くて、始めの三人のところはかなり差を広げられて、トップの一高から二〇m、二位早稲田、三位慶応とは一〇m位の遅れで、アンカーの伊達さんがバトンを受け継ぎました。第一走者は渡辺文吉さんという方で、伊達さんよりも一年下ですが、とても人望があつて、キャプテンに対しても何でも直言出来る方で、「これだけ離れているけれども痾癪かじを起こすなよ、四〇〇m走つて最後のところで捕まえて勝つたらいいのだから考えて走れよ」と言つて伊達さんを送り出しました。そのことを伊達さんはききすぎたのか、なかなか前に追いついてくれないので、関西学院の選手はやきもきして見ていたのですが、伊達さんは上手く時間配分をしていて、最終コーナーのところに慶応の応援団席があつたのですが、そこでスーッと慶応を抜いて、その次に早稲田の応援席があつて、そこで早稲田を抜きました。その前には一高のものすごい応援席があつたのですが、そこで一高を抜いて、アツという間にテープを切つた、という劇的なレースをやりました。これがまた新聞に載つたりして、当時の語り草になつたという

ことです。春秋を通じて、これだけ抜群の成績は、なかなか作れないというものを、一挙に残したということです。

山本 いままででのごとく、何かお聞きになりたいことはございますか。

小玉名譽教授 神戸高商と対抗戦が続いていますが、その時の関西学院の組織は何ですか

米田 専門学校の高商です。それまでに高等学部として文科、商科という名前で動き出して、それがしばらくすると、商科の勢力が非常に強くて分離しまして、商科だけの学生会が出来たりしました。そして一九二一（大正一〇）年から商科から名前が変わりましたので、実質的には関西学院高等商業学部です。

中学部野球部の大活躍

もうひとつ、一九二〇（大正九）年に、中学部が野球で優勝していますね。朝日新聞社の大会です。この頃の中学部はものすごく強かったのです。中等大会に出て行っているのですが、その他にクラブともやりますし、大学とも、早稲田とも、慶応ともやりました。残念ながら早稲田には、

もう少しというくらいのごい試合をしましたが、勝てなかったのです。当時、選手はいまのようにたくさんなくて、野球は九人ですが、せいぜい多くて十二、三人で少数精鋭主義で練習をしっかりとしました。試合でも、とても交代は考えられなかったのです。そして、一九二〇（大正九）年に初めて中学部が優勝しました。

それまでも、伏線的にこの時に優勝しておかないといけないという時がありましたが、いろんな出来事が起こるのですね。一九一七（大正六）年に優勝戦までいくのですが、相手は愛知第一中学校です。〇対〇のあと、六回に関西学院が一点とって、その裏二者を三振にとってツーアウト、次の打者にフォアボールを与えた途端に猛烈な夕立に見舞われます。六回をもってストップしたら、試合は成立するのですね、もうワンアウトとっていたら、関西学院の全国優勝です。それが雨が降ってきたものですから、審判団は試合中止、明日再試合ということにしたんです。次の日に試合をして、延長一四回、残念ながら一対〇で負けました。一九一八（大正七）年、この時も抜群に強くて、どこから見ても関西学院は優勝だと言われていました。ところが、いよいよ試合という時に「米騒動」が勃発して、大会中止となり、関西学院にとって残念至極な年となりました。し

かし、一九二〇（大正九）年に慶応の普通学部と優勝を争い、当時でも記録的なスコアで、一七アルファ対〇で念願の全国制覇を遂げました。その後、一九二八（昭和三）年に選抜で優勝しました。このように、中学部は非常に強かったのです。

明治・大正の原田の森時代、時代が時代で少数精鋭主義とか勝負にこだわるとか、野次を飛ばすとか、喧嘩をするとか、スポーツの前時代的な感じは付いて回りましたけれども、少しずつそういったことを払拭しながら時代は動いていき、一九二八（昭和三）年、一三の運動部が八つの関西優勝を遂げました。そのような好記録を作って上ヶ原へやってきました。

山本 ありがとうございます。

関西学院と神戸高等商業学校とは、スポーツに限らず、今述べられたような関係だったということは、いろいろな資料を見ても判るのですが、確かに神戸高商は官立の学校ですね。こちらは学生数は同じくらいの規模の専門学校だったのです。一九一八（大正七）年に大学令が交付されて、早稲田も慶応も、大学となったのは一九二〇（大正九）年になったと思うのですが、それまではみな専門学校だった

わけです。大学は帝国大学だけしかない時代でした。やはり大学は上で、高等商業学校、専門学校は少し下でというようなところがあったのではないのでしょうか。

当時スポーツに、年齢制限というのがあったのですか。学生は、在学していればよかったですよね。

米田 ちょっとそれは擱んでおりませんが……。

今言いました神戸高等商業学校は官立で、関西学院は私立である、また、神戸高等商業学校の先生が相当数、関西学院に教えに来ていたということもあって、世間も関西学院は神戸高商の落ち武者が行く学校だと見ていたというのが事実でしょうし、神戸高商の学生は野暮つたい、関西学院は、服装は派手だが、何をしてでも神戸高商の方が一段上だと評価されていたと思われまます。

山本 そうですね、そういうことだったと思いますね。後に、神戸高等商業学校が大学になった時には四年制になるんですね。しかし、規模からいったらうんと違う学校だし、関西学院としては敵対心があったんですが、向こうは何だと思っていたでしょう。

米田 間違いなく、ずっと下だと思っていたと思いますね。

山本 関西学院の歴史の中で、スポーツの歴史の研究が遅れていましたので、百年史を書くときにも難儀をいたしま

した。こうして書いていただいたので、非常にまとまったものとなりましたし、いろいろなことがよくわかりました。お聞きしていたら、臨場感溢れるお話でした。何かお聞きになりたいことがありますでしょうか。

当時、学生スポーツが日本のトップのスポーツだったのですね。職業人など大人はスポーツはしなかったのでしょうか。

米田 やはり昔の武士階級の延長で学生がやるという……。

山本 しかも、社会的指導的な立場の人は、かなりの方がスポーツをやっていますね。それは、今も基本的にあまり変わっていないのではないかと思います。今はスポーツをやるということは勉強が出来ないみたいに言いますが、そんなことはないんじゃないかと思います。

米田 そんなことは全くありません。昔は優秀な人がいて、スポーツもやれば文学も音楽もする。そういう人がかなりおられましたね。また言いませんでしたが、学校の先生方との結びつきが強かったですね。私自身を振り返って申しますと、児玉国之進先生、馬淵得三郎先生、北野大吉先生、といった方々があげられます。

山本 北野大吉さんの義妹さん、やよひさんが相撲部OBの唄野政一さんと結婚しています。

井上琢智経済学部教授 私は『関西学院史紀要』第7号

「関西学院の人びと」で北野大吉さんを取り上げる際に、大吉先生の娘さん、内山富士子さん、と連絡を取り合い、いろいろお教え頂いたり、資料を頂いたりしました。また、乾さんについては次号の『紀要』でとりあげるつもりです。偉大な先輩ですから。

ところで、最初は庭球部の、後に体育会としてのスローガンになった、「Noble Stubbornness」について少し説明していただけないか。

“Noble Stubbornness”のスローガン

米田 そうですね。本日お話ししなければならないことの一つに、そのスローガンのことがあります。

一九二〇（大正九）年六月一三日、神戸高商に七戦して七敗した関西学院庭球部の面々は、その翌日に深刻な反省会を開きます。その結果、顧問の畑敏三先生に、何か精神的な拠り所となるスローガンを与えてもらおうと衆議一決します。

先生はこのことを快く受け入れ、かなり短い間に“Noble Stubbornness”という標語を案出して、部員たち

にその出典、その意味するところを懇切に教示しました。

先生は、アメリカ留学中にテニスの大きな試合を見て、「テニスに粘りだ」と会得したことがありました。英文学者の先生は、ある英国人の詩の一節に“Noble Stubbornness”という言葉があることを思いに留めていました。従ってかなり早くにこの言葉を、庭球部に提示する候補と考えていたのであります。

“Stubbornness”を標榜するスポーツの集団はそれこそ雲の如くでありましょう。関西学院はこれに“Noble”を伴うものでなければならぬと先生は考えました。“Noble”には「高貴な・上品な・気品の高い」などと「堂々たる」の意味があります。それは「フェア・プレー」を指向することを意味します。遙かな昔、普通学部在学中、「公明正大」という学院のスクール・モットーに接していた先生は当時の日本のスポーツ観の弊に思いを致していたからだと思います。

すべては国家のため、母校のためとする、国家主義的スポーツ観、何が何でも、いかなる手段を使っても勝たねばならぬとする、武士的スポーツ観、さらに観客・応援者の立場からみると、勝敗とそれをめぐる紛争を期待して、一時的な興奮にエネルギーを発散させる、後進国的ス

ポーツ観」などが当時の日本スポーツの主流を形成しておりました。しかし、神によって建てられた我が関西学院のスポーツは「堂々たる」もの、「公明正大」を目指し、「フェア・プレー」に根差したものでなければならぬと畑勲三先生は強く願い、その思いを“Noble”に託しました。全国に冠たる“Noble Stubbornness”のスローガンはこうして作られました。

『上ヶ原篇』に向けて

山本 『原田の森篇』には、皆さん亡くなられた方が登場しましたが、次に書かれる『上ヶ原篇』では現在生存されている方々が続々と登場されると思います。

米田 (笑い) 私が生きていますかどうか判りませんが：。そうですね、『原田の森篇』を書くときは、かなりの方にお目にかかることが出来ました。たまたま一九六六(昭和四一)年から直接お会いして聞き書きすることが出来ました。ありがたいタイミングでした。もし私がこの本を書き始めるのが、五年、十年遅かったら、また違ってしまいました。山本 よくぞ、関西学院のスポーツ史について、記録に残していたのだと思います。本日は、どうもありがとうございました。(拍手)